

ジョン・ダンの『唄とソネット』について

——第3部「愛における魂と肉体」——

野路智司

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2000年11月1日 受理)

第二部においては虚構のなかであれ、現実のなかであれ、最愛の人との様々な離別を扱った詩を題材にし、ダン特有の学術的着想により、恋愛の大敵となる「変化」と「死」を彼がいかにテキスト上で超克しているかを眺めてきた。神学、ネオプラトニズム、スコラ哲学、航海術さらには錬金術に関する知識は、少なくとも詩において、魂と肉体の二元論を一元化し、そこから生まれてくる男女間の永遠の愛に達するため、詩人ダンによって自由自在に援用されるのである。

現代よりももっと人々が「死」に近しかった時代に生きたダンは、“memento mori”に“sapera”という言葉 さらに続けるかのように、日常の中で「死」の後にも訪れる永遠の世界が存在することを前提として生きていたといってもよい。恋愛に限って言えば、その永遠の世界では、地上を離れ、魂となった男女が再び出会い、二人は永劫の愛を獲得するのである。このように書けば、天国での再会という陳腐で常套的な脚本に沿って彼の恋愛詩が書かれているなど一言でもって作品は片付けられるのかもしれない。しかし、彼の恋愛詩は、結論よりもその結論の導出過程に彼の独自性があり、読み手となる我々も、そのような結論が導出される際に用いられる彼の学術的着想に付き合わねばならないのである。書き手ダンの思考と感情をうまく繋ぎ合わせながら、読み進めてゆくことによって、初めて彼の恋愛詩を味わうことができるように思える。

第三部ではこれまでに扱った彼の恋愛詩の特徴が見られることはもちろん、さらにそれとは違った形でダンが現在の愛を定位し、得意の形而上学で永劫の愛へと思いを馳せていると思える作品を扱う。

ダンは「おはよう (“The Good-morrow”)」の19行目で「滅ぶものはすべて均質に混ざり合っていないかった (“Whatever dies was not mixed equally”)」と記している。¹さらに第二部にもあったように、二つの物質が均等・均質に混ざりあった場合に、永遠性を獲得する、という考え方にはすでに馴染んでいるはずである。「聖列加入 (“The Canonization”)」の第3スタンザでは、この着想に基づいて、語り手は愛が持つ魔術めかした神秘性を文字通り情熱的に語っている。

Call us what you will, we are made such by love;
 Call her one, me another fly,
 We're tapers too, and at our own cost die,
 And we in us find the eagle and the dove.
 The phoenix riddle hath more wit
 By us; we two being one, are it.
 So, to one neutral thing both sexes fit.
 We die and rise the same, and prove
 Mysterious by this love.

何とでも呼ばばよい 愛が二人を結んでいる
 彼女は愛の炎に飛び込む蛾 僕もそれと同じ蛾
 二人は愛の炎を燃やしながら尽きてゆく蠟燭で 自らの愛ゆえに滅びてゆく
 僕達のなかには逞しい鷲の姿と優しい鳩の姿がある

僕達によりあの不死鳥の謎はより大きな意味を持つことになる
 僕達二人は今や一つとなり 不死鳥になっているのだから
 異なる男女の性が調和して どちらでもない一つのものとなす
 二人は死ぬと同時に復活し
 この愛により神秘なるものの存在を証すのだ

激しい愛の中に飛び込んで行く二人の様子が、燃えさかる愛の炎に飛び込んで行く「蛾」に喩えられる。さらに強烈な情熱を表現するため、次行で「蛾」は自らを溶かしながら、炎を発して燃え尽きてゆく「蠟燭」に変わる。そして、二人は自らのために焼き滅んでしまうのである。可視物である肉体が炎により焼かれた後には、浄化された魂だけが残るのである。残った二人の魂はそれぞれ「鷺」と「鳩」となって、再び飛び立つのである。女性は「鷺」となった完全な男性に逞しさを、そして男性は「鳩」となった完全な女性に優しさを見出す。実在する鳥類のイメージは伝説のフェニックスへの連想に繋がってゆき、単なる滅亡から復活へのベクトルが、愛という名のもとにさらに大きな意味を持つことになる。「不死鳥」は一羽しか存在せず、両性具有とされていた。ここで二人の性差と別個の存在は解消され、一なる中性物へと転換する。よって、均等・均質に混ざり合い、一体化し、そして完全性と永遠性を獲得した二人は、愛の神秘そのものを証明する存在になるのである。二人の愛は聖化されてゆく。

ところが、「蛾」と「不死鳥」はダン独特の発想ではなく、ペトラルカのカンツォーネにある「蝶」と「不死鳥」のイメージを、ガリーニが自作のマドリガルのなかで組み合わせたものが下敷きとなっているとも考えられる。一匹の「蝶」として愛する女性の瞳に飛び込み、燃えさかる炎に身を焼かれて死んでしまうのであるが、この炎こそは自らに幸いをもたらす。なぜなら、「蝶」として死のうとも、「不死鳥」として復活するからである。ちなみに「蝶」と「不死鳥」のイメージはペトラルカ以前のシシリー派であるジャコボ・ダ・レンティーニの作品にも登場している。

「不死鳥」のイメージは、シシリー派に始まり、ペトラルカそしてペトラルカ派の詩人達に作品中で用いられた。ペトラルカは憧れの貴婦人ラウラを表現するために、このイメージを用いた。そして彼に影響を受けた詩人達は様々な形で、この伝説上の鳥を利用した。イギリスではダニエルが詩によって、大切なデリアの生命を「不死鳥」のように再び取り戻すことを記し、ジャイルズ・フレッチャーは自らの思いによって、不死鳥のように復活することを願った。さらにシドニーは恋人ステラを「不死鳥」と言い表している。

当時、「fly」は羽根を有するあらゆる昆虫を指す語として用いられていたが、ダンは「蝶」を闇の中で蠟燭の光に飛び込んできては、命を落としてゆく「蛾」に変えている。「蛾」は雌雄両性体で、死後も復活する昆虫であると考えられていた。その性質はそのまま彼が用いる「不死鳥」へと繋がってゆく。ダンの独創性はイタリア詩から英詩に移入された伝統的なイメージである「不死鳥」に、男女の一体性を与え、両性具有化したことであった。

エリザベス朝の俗語として動詞“die”の持つ意味をここで見逃す訳にはゆかない。「死ぬ」とは性行為が絶頂を迎えて、終了することを表す俗語でもあった。また、性行為を重ねることは、寿命を縮めるとも考えられていた。したがって、「蛾」と「蠟燭」は性行為とも深く繋がってくることになり、このスタンザの前半三行はオルガスムを迎えてから果てる二人の姿を表していることにもなる。「死ぬ=果てる」と同時に別個の男女「鷺」と「鳩」としてベッドの上で「復活する(“rise”）」二人の性行為を表現していることも暗に読み取ることができるのである。

そう考えれば、このスタンザの中でダンは神聖なる愛を表に出しながら、同時に肉体の繋がりを重視する愛の重要性も暗示し、二人が霊肉両面で一体となっていることを巧みに表現していることになる。続く第5スタンザでは未来へと流れる時間上で二人の愛が永遠化され、二人がその愛によって聖者となりうるということが説かれている。ならば、どのようにしてダンは二人の聖列加入を許して貰おうというのだろうか。

We can die by it, if not live by love,
 And if unfit for tombs and hearse
 Or legend be, it will be fit for verse;
 And if no piece of chronicle we prove,
 We'll build in sonnets pretty rooms;

As well a well-wrought urn becomes
The greatest ashes, as half-acre tombs,
And by these hymns, all shall approve
Us canonized for love.

愛により僕達は死んでも構わない たとえ愛によって生きられなくても
立派な墓碑銘を建てたり 豪華な棺に納まる値打ちがなくてもいい
伝説にならなくてもいい 僕達のことは詩にしておくのが一番だ
年代記に全く残らなくても
僕達はさまざまな詩の中にさまざまな小さな部屋をしつらえる
大人物の遺灰には半エーカーもある墓所や
手を凝らした壺が似つかわしいが
二人の愛を書き記した詩によって みんなに認めさせてやろう
僕達が愛により聖列加入したことを

二人は愛の殉教者たることを選択する。二人の亡骸は立派な「墓碑銘」の下に眠ったり、豪華な「棺」に納まったり、また聖者として「伝説」となるのではなく、二人が生きた愛の形を「詩」に表現し、後生に残して、殉教するのである。公に何人にも認められる「年代記」などではなく、むしろ歴史のなかに埋もれるほうがふさわしいと考えるのだ。そして、真の愛には二人の肉体を滅ぼす時の流れが入り込む余地はない。

ここでの“sonnets”は14行詩ではなく、一般的な詩歌、特に恋愛詩を意味している。第1部のタイトルに示したように、「詩」のなかに「二人の小さな部屋」を作ることを選ぶ。そして、数多の恋人達のなかに埋もれながらも、そのようなプライベートな言葉を綴り続け、二人の愛が歴史に堂々と名をとどめる「聖者」の生涯にも匹敵することを、聞き手や読者に知らしめようとするのである。二人は自分達以外の存在を全て除外した絶対性という枠組みのなかで、崇高なる二人の愛を後代に伝えて行く決意をする。

今や崇高なる男女愛の化身となった二人が、後代の人々によって崇められる言葉により、ダンはこの詩を締めくくる。

And thus invoke us: “You, whom reverend love
Made one another’s hermitage;
You, to whom love was peace, that now is rage;
Who did the whole world’s soul extract, and drove
Into the glasses of your eyes
(So made such mirrors, and such spies,
That they did all to you epitomize)
Countries, towns, courts: beg from above
A pattern of your love!”

そして人々は僕達にこのようにして祈るのだ
「尊い愛で互いの庵を一つにしたお二人
今では愛も激しくなっておりますが、お二人の頃は愛も平和そのものでした
全世界の靈魂を抽出して
互いの瞳というガラス容器に満たしたお二人
(素晴らしい鏡となり、覗きガラスとなり
あなた方はこの世界に存在する万物の縮図となりました)
様々な国家や町や宮廷があなた方に収斂したのです
どうか天よりお二人の愛の手本を示して下さいように」

4行目からは錬金術のメタファーが用いられている。「全世界の魂」は昇華や蒸留により抽出され、容器と

しての「互いの瞳というガラス容器」に貯蔵される。そして、ガラスは「鏡」や「覗きガラス」に変化する。「全世界の魂」から容器の表面上に映し出されるのは、まさに世界に存在する万物であり、ダンが恋愛詩の中で得意とする全世界が個人へ収斂してゆくという着想により、愛し合う二人はついに相手が自分にとって全ての存在、全世界と等価な存在になったのである。なお、ダンは元来、ローマカトリック教徒であったが、アングリカンチャーチに改宗した。“beg”で始まる最終の2行は、自らのために聖人に祈りを捧げるとするローマカトリックの教えに合致しているようである。²

次の詩「恍惚 (“Ecstasy)”」では魂と肉体が愛のなかで持つ意義を、ダンは向かい合う二人の男女の姿から読者に説いている。タイトルとなっている“ecstasy”とは、肉体より抜け出した魂が神と合一することを意味しているが、ここでは男女の魂と肉体の関係を、魂から論じ始め、最終的に肉体の重要性を説きながら、ダン独特の論理で愛の素晴らしさを説いている。

書き出しは愛し合う二人の至福の瞬間を描くのにふさわしいどこか暖かなトーンに包まれているが、これはやはりシドニーやグレヴェル、ロード・ハーバートさらにウィザーが、既に作品の中で描いた場面を踏襲している。陽気な5月、佇む二人の男女、言葉を交わさずとも互いの意を十二分に汲み取ることができる相思相愛の仲、愛にまつわる対話といった設定は、ダン以前からの英詩の伝統に沿った場面展開である。だが、ダンは独自の術学を用いて、さらには遊技的な要素も加えている。たとえば、第1スタンザで用いられている“pillow”や“bed”、さらには“pregnant”や“swell”といった単語に、屋外にいる恋人達の存在にプライベートな二人の寝室や妊娠といった性愛の臭いを嗅ぎ取ることができるであろう。何気ない描写から霊肉両面からの愛に支えられた二人の関係をダンは示唆している。

Where, like a pillow on a bed
A pregnant bank swelled up, to rest
The violet's reclining head,
Sat we two, on another's best.

ベッドの上にある枕のように
ふっくらとした堤が盛り上がり
葎の花が頭を垂れて休むところで
僕達二人は互いにうっとりとして座っていた

ここに用いられている「葎」は互いの思いに忠実であり、嘘のないことを表す一種のエンブレムとして機能しており、二人の愛が真なることを示唆している。

第2スタンザからは、“cement”や“fast”等の言葉を非常に効果的に用いながら、一種グロテスクなまでに密着した二人の肉と霊が描かれる。

Our hands were firmly cemented
With a fast balm, which thence did spring;
Our eye-beams twisted, and did thread
Our eyes, upon one double string;

二人の手は掌から滲み出た粘着力のある芳脂で
しっかりとくっつき
二人の視線は絡み合い
我々の瞳と瞳を繋ぐ二重縫りの一本の糸を紡ぎだした

ぴったりと張り付いた二人の手は、一つに結ばれる二人の視線へと繋がってゆく。当時の視覚理論によれば、眼は物体に対して光線を投げ掛け、また、物体からも眼に向かって光線が投げ掛けられて、物体は知覚されることになっていた。この考え方が愛し合う二人の男女の間に適用され、ダンは得意のコンシートに仕上げている。互いの瞳を覗き込む二人の視線が作り出す「二重縫りの糸」は、女性の瞳には男性の姿が、男性の

瞳には女性の姿が知覚されることにより、「一本の糸」として二人の左右両眼を結ぶのである。

続くスタンザは前のスタンザを別の表現で言い換えているが、ここにも性愛を匂わせる「繁殖 (“propagation”）」という語が用いられている。

So to intergraft our hands, as yet
Was all the means to make us one,
And pictures in our eyes to get
Was all our propagation.

二人の手をしっかりと一つにすることだけが
僕達が一つになる手段だった
二人の瞳に映る互いの姿だけが
僕達の生み出せる子孫だった

テーマは肉体を離脱した二人の魂へと転換する。まさに二人の魂は「解脱」していたのである。

As, 'twixt two equal armies, Fate
Suspends uncertain victory,
Our souls (which to advance their state
Were gone out) hung 'twixt her and me

戦力を互角とする両軍の間では
運命の女神がどちらに軍配を上げてよいか分からぬように
二人の魂は（すでに肉体から離れて魂へと遷ってはいるが）
君と僕の間でまだ付かず離れずの状態だ

And whilst our souls negotiate there,
We like sepulchral statues lay;
All day, the same our postures were,
And we said nothing, all the day.

僕達の魂がその場で折衝している間
僕達は墓石代わりの石像のように横になり
一日中姿勢も変えずにじっとしていた
本当に一日中二人は一言も言葉を交わさなかった

すでに一つとなった「手」や「瞳」と違い、二つの魂は今だ一つとならず、互いに熱い思いを秘めながらも、その思いのエントロピーは今や完全な平衡状態にあり、二人の間で静止したままなのだ。最初のスタンザで二人は座っていたが、ここでは二人の肉体はあたかも死体のように横たわっており、その様は意識はもちろん血も肉も持たない「石像」と表現されている。そして、言葉も交わすことなく、完全な沈黙を保っている。肉体の活動は完全に休止し、解脱した二つの魂だけが活動を続け、真の愛を成就するためにひたすら融合へ向かおうとしているのだ。ダンは“ecstatic”な瞬間を“static”に描いている。

次のスタンザからはネオプラトニズムを信奉し、愛に関する思想を極めたと思える第三者の立場を仮定法で持ち出す。愛とは魂の結合であるとの愛に関する本質的な事実をそのような立派な人物が把握していても、愛についてはさらに学ぶべきことがあるとダンは主張するのであるが、まずはそのような人物の愛に関する考えに耳を傾けてみよう。

If any, so by love refin'd

That he soul's language understood,
And by good love were grown all mind,
Within convenient distance stood,

もし愛によって洗練され
魂の言葉が理解でき
素晴らしい愛によりどこからみても愛の心と化した人物が
すぐそばに立っていたとすれば

He (though he knew not which soul spake,
Because both meant, both spake the same)
Might thence a new concoction take,
And part far purer than he came.

二つの魂が同じことを言い 同じ言葉を話すので
どちらの魂が話しているのか分かりはしないが
それでも僕達の魂の言葉から新たに不純物を取り除かれ
ここに来たときよりもずっと純粋になって立ち去るだろう

“concoction”とは高熱により炉の中で金属が不純物を除去され、純化されることを意味している。錬金術や科学に関する知識を散りばめるところがいかにもダンらしい。当時、浸透していた考え方によると、太陽からの熱は地表下で金に精練されるということであった。ここに至って、二人の魂はネオプラトニズムに精通した傍観者としての第三者に対しても、さらに学ぶべきことを教示するだけの重さを持つことが分かった。

肉体から抜け出て、魂の状態になることが愛の上でどれほど大切かが次のスタンザから肉に重きを置く愛と対比される。タイトルとなった“Ecstasy”が初めて詩行に登場し、詩行は肉体を抜け出た二人の魂の言葉へと変わってゆく。

'This Ecstasy, doth unperplex,'
We said, 'and tell us what we love;
We see by this it was not sex;
We see we saw not what did move.

「この恍惚で本当のことが明らかになる」
「さらに僕達が何を愛しているかを教えてくれる」
「この今の状態から僕らが愛し合う理由は性ではないことが分かり
僕達を動かしているものを僕達が知らなかったことも明らかになる」

二人が体験している「恍惚」は、二人の魂に愛の本質に関する新たな洞察を与え、二人が愛し合う真の理由を知ることを可能にしてくれた。肉体面での情熱でなく、二人の男女として互いに欠けているものを補い合うそれぞれの魂からの強い希求こそが、二人の愛の源泉となっているのである。均等・均質に混ざり合ったものは永遠性を授けられる。ここまでダンは意識して、このスタンザを書いている。なお、付け加えておくと、ダン『説教集』では疑念を挟んでいるが、「恍惚」の本質的な概念は、肉体から解放された魂が五感や理性を用いず、直接に知を得ることである。

続くスタンザでは、二人の魂の均質度をさらに高める愛の働きが述べられる。愛の攪拌により、一つになった男女異質の魂は完全に均等・均質になるまで、混ぜ合わされる。その攪拌過程が明示されている。

'But several souls contain
Mixture of things, they know not what,

Love these mix'd souls doth mix again,
And makes both one, each this and that.

でも別々の魂に含まれているのは
さまざまな混合物 それがどんなものかは分からない
愛はこの混ざり合った魂を再び混ぜ合わせ
二人の魂を一つにして それぞれが僕であり君になる

ここでの“several”は“separate”の意味で用いられ、魂には「さまざまな混合物」が含まれていると記されている。人間の魂は神の魂と同じであり、本来は複合物ではなく、単一でありかつ分解することなく、永遠に存在すると考えられていた。ここでダンが「混合物」と表現しているのは、人間の魂は三種類の魂、それぞれ、「動植物の魂 (“vital soul”)」、「動物が持つ感覚の魂 (“sensitive soul”)」、「そして「人間のみが有する理性の魂 (“rational soul”)」が一つとなって出来ているという考え方を下敷きにしているのであろう。最終行は愛の作用によって、二つの魂が完全に均質になり、全く同一の元素で構成され、男女の区別さえもがなくなったことを示している。ネオプラトニズムに典型的な表現である。

葦は第一スタンザに恋愛面での「忠誠」を表すエンブレムとして登場しているが、続くスタンザでは葦をより肥沃な土壌に移植することによって、数も色も生命力も増すということを述べている。当時の記述によると、肥沃土ではなく、地中で種子が混ざり合うことにより、花の数が増すと考えられていた。ベーコンも『自然史』のなかでこのことに触れている。ダンはこの移植に関する知識に基づいて、愛により脆弱な一つの魂が別の魂と融合すれば、著しく成長することを述べていると思われる。

'A single violet transplant, —
The strength, the colour, and the size,
All which before was poor, and scant,
Redoubles still, and multiplies.

一本の葦を移植すると
生命力と色彩と大きさは
もともとは弱っていたはずなのに
いつも倍になり さらに花の数も増えてゆく

二人の魂の「生命力 (“strength”)」、「色彩 (“colour”)」それに「大きさ (“size)」が、真の愛に触れると、倍になるどころか、著しく向上するというのである。

前のスタンザにある一株の葦を魂に置き換えれば、次のスタンザとの関連性が読み取れる。地中で種子が混ざり合って、葦の生命力が増してゆくように、一つの魂も別の魂と混ざり合うことによって、一層大きな力を獲得するのである。

'When love, with one another so
Interinanimates two souls,
That abler soul, which thence doth flow,
Defects of loneliness controls.

そのようにして愛が
二つの魂を一つにして 生命力を与えれば
より強くなった一つの魂が流れ出て
結びつく前の孤独の苦しみも消してくれる

愛の最大の敵は「変化」と「死」である。ダンは新しく生まれ変わった二人の魂にこれらの敵に対する完

全な免疫力を与える。「変化」は二人の魂から完全に遮蔽されるのである。その際に利用されるのは、原子が持つ不滅なる性質である。

**'We, then, who are this new soul, know
Of what we are compos'd and made,
For the atomies of which we grow,
Are souls, whom no change can invade.**

この新しい一つの魂となった僕達は知っている
僕達を構成しているものを
なぜなら僕達の今の状態 原子の状態こそが
二人の魂であり どんな変化も入り込む余地などないからだ。

魂の語りはまだ続くが、ここからは肉体へと巧みに話題が転換され、ダンお得意の理屈めいた口説きとも思える語りへとトーンが変化してゆく。離脱した魂から今度はその魂が宿る場所である肉体へと話題が転換され、ここからは肉体賛美が始まるのである。ダンは意図的に肉体への言及を後回しすることによって、相手の女性の心を上手く動かそうとするのである。

**'But oh alas, so long, so far
Our bodies why do we forbear?
They are ours, though they are not we, we are
The intelligences, they the sphere.**

でも残念だ 今までこんなに長い間
どうして僕達二人の肉体を避けているのか
肉体は僕達ではないが 肉体は僕達のもの
僕達二人は共に天使であり 天使こそは天球

アリストテレスによれば、各々の天体はそこに棲む精霊つまり知力を備えた天使によって支配され、動かされる球体を成していた。そして、キリスト教に入り込んだプロレマイオスの考え方では、様々な階位の天使が第一天球となる月から第九天球である透明球体を支配しているとされたいた。当時のスコラ哲学に基づいて、ダンは肉体を天球に喩え、その天球を統べる二人を天使として崇高化しているのである。

引き続いて、ダンは肉体が魂に与えてくれる力と五感を引き合いに出し、錬金術の知識を援用して、肉体への賛美をより強固なものにしてゆく。

**'We owe them thanks, because they thus
Did us, to us, at first convey,
Yielded their forces, sense, to us
Nor are dross to us, but alloy.**

僕達は肉体に感謝すべきだ 肉体が
まず僕達を結びつけ
僕達に力と五感を授けてくれた
肉体は僕達にとっては金属の滓ではなく 立派な合金なのだ

“dross”は錬金術の実験で出る何の価値もない溶解した金属滓のことである。それに対して合金とは実験が成功した際に得られ、金に近い有用な金属を指している。

次の三つのスタンザでは魂から肉体へとトーンがさらにシフトしてゆくのが分かる。そして愛において魂

の思いを具体的に感知することができるのは、肉体による行動であると結論する。

**'On man heaven's influence works not so,
But that it first imprints the air;
So soul into the soul may flow,
Though it to body first repair.**

まず空気に伝わってから
天の力は人間に作用するものだ
だから魂は魂に流れ込んでゆくだろう
最初に肉体へと赴こうとも

先述したこととも関係するが、スコラ哲学では天体が人間の魂よりも優れた天使によって導かれていると考えられていた。そして大気を通して、天の力は人間に作用するのである。ダンはこのことを踏まえ、魂は肉体を媒体として流れ込み、その肉体から別の魂へと流れ込み、両者が合体することが可能であるとしているのである。つまり、「天の力」：「空気」＝「魂」：「肉体」というアナロジーが用いられていることが分かる。

**'As our blood labours to beget
Spirits, as like our souls as it can
Because such fingers need, to knit
That subtle knot, which makes us man:**

二人の血液が努力して作り出す
二人の魂に限りなく似通った靈気を
そのような精気を湛えた二人の指が必要とされ
あの微妙な結び目を結び それで二人は人間となるのだ

“Spirits”とは肉体と魂の中間性のものであり、薄い蒸気状あるいは希薄な液体で、非常に活性があり、血液から抽出されるものであるとされていた。魂に働きかけた場合には、様々な感覚が生じ、肉体が活動するために魂に用いられていたのである。したがって、魂と肉体を結びつけるためのものであった。「靈気」が魂と肉体を結びつけるように、指もまた二人の魂と肉体を結びつけることになる。1683年に出たパートンの『憂鬱の解剖』では、魂と肉体の「媒体」とされている。

**'So must pure lovers' souls descend
To affections, and to faculties,
Which sense may reach and apprehend
Else a great Prince in prison lies.**

だから純粋な恋人の魂は
感覚にまで届きかつ感知できる
感情や行動に降りてゆかねばならないのだ
さもないと愛の大王も獄中に閉じこめられたまま

魂から肉体へと話題を転換する根拠は、ダン特有の論理で述べられた後、愛における肉体の重要性が述べられる。次のスタンザはこれまでの論拠をまとめる分かりやすい表現が用いられている。そして、『唄とソネット』の他の作品中にも見られるように、二人は理想の愛を具現する存在として君臨するのである。

To our bodies turn we then, that so
 Weak men on love reveal'd may look;
 Love's mysteries in souls do grow,
 But yet the body is his book:

さあ二人の肉体へ戻ろう
 愛に弱い者が愛の啓示を学び取ることができるように
 愛の神秘は魂の中にこそ育つが
 肉体は魂の書物なのだ

'And if some lover, such as we,
 Have heard this Dialogue of One,
 Let him still mark us, he shall see
 Small change, when we are to bodies gone.'

僕達のようにもし誰か恋をしている者が
 この一つとなった魂の対話を聞き終えれば
 さらに我々の姿を見せてやろう
 肉体へと還らねばならなくとも ほとんど変化などないことを³

肉体面での愛は、やはり魂の段階での愛と同じく重要なのである。なぜならば、我々は肉体と魂で出来ているからだ。そして、この「恍惚」のなかで肉体から魂へ、そして再び魂から肉体へと論理を進めてゆくなかで、場面は地上の世界から天上の世界にまで展開されている。「二人の小さな部屋」は理論上、天の世界にも構築されるのである。そして、この詩、特に第18スタンザを踏まえて、恋愛において肉をも重視するダンの恋愛観は、「別れの歌：書物に寄せて（“A Valeidiction: Of the Book”）」の第4スタンザにも現れている。

Here Love's divines (since all divinity
 Is love ore wonder) may find all they seek,
 Whether abstract spiritual love they like,
 Their souls exhal'd with what they do not see,
 Or, loth so to amuse
 Faith's infirmity, they choose
 Something which they may see and use;
 For, though mind be the heaven, where love doth sit,
 Beauty a convenient type may be to figure to it

ここに愛の司祭は（全ての聖なるものは
 愛か驚異のどちらかであるから）求めているものをすべて見出すことになるだろう
 抽象的な精神面での愛を好んで
 男女の魂は肉体から抜け出て恍惚の状態にあるとする司祭であろうと
 精神に根ざした愛にたいする信仰が
 衰えたことを認めずに
 目に見えて触れることの出来る肉体を好む司祭であろうとも同じこと
 確かに精神は愛が宿る天国だが
 美しい肉体は愛を身近な形にしたものだから

男女間の愛そのものを神聖視しながら、ダンも魂の愛を“abstract spiritual love”として表現し、それに対

立する肉への愛を“Something which they may see and use”と「肉体」そのものを掲げて、両者のいずれかを信仰する司祭の立場を描いている。そして、両者共に真の愛には不可欠であると結論しているのである。

“spiritual love”と“physical love”さらに“terrestrial love”と“celestial love”のジレンマは、ダンの論理によって、見事に解決されているように思えるが、最後にさらなる解決法を示している詩を取り上げる。「空気と天使 (“Airs and Angels”)」は、ネオプラトニズムに特有な魂の先在を話題にすることから始まるが、肉体を得る以前、魂の状態で存在していた頃、すでに二人は結ばれていたとし、現在の愛を共時的にも通時的にも正当化するところから始まっている。

Twice or thrice had I loved thee,
Before I knew thy face or name;

君をすでに二度も三度も愛したことがあったんだ
君の顔も名前もまだ知らなかった頃だけど

ここでタイトルにある「天使」について考察してみたい。「天使」は次行から登場する。ダンが「天使」を非物質的なものと考えていた確率は非常に高いが、そう考えると、形を持たないものが人間とどのようにして交信するかが問題となる。この問題の解決策として、ディオニシアスやトマス・アクウィナスのようなキリスト教学者は、プロティノスに見られるネオプラトニズムの一原理を既に改変していたのである。このプロティノスの原理とは人間の魂に関するものであった。人間の魂はこの世に降臨する際、最初にエーテルで構成された肉体と結合し、それが魂の器として機能していたとする。プロティノス自身はこの原理を解明していないのであるが、弟子のポルフィリーとジャンブリカスがその重責を果たした。そして、この考え方は17世紀の哲学者カッドワースにまで伝わったのである。ところが、ディオニシアスやアクウィナスはこの考え方を人間の魂には該当しないものとし、逆に「天使」の姿に関してこの考えをいくぶん援用した。「天使」が人間と交信し、影響を及ぼすためには、我々人間の通常の肉体と比べて、多少なりとも希薄な肉体の衣を身に纏うかもしれない。そのように考えたのである。

以下の詩行のなかにあるダンの着想の核となっているのは、彼自身も馴染んでいたモーゼス・マイモニデスの見解である。「天使」は炎や人間と同様の肉体を身に纏うように思えるにすぎない。さらに付け加えておくと、実際の詩行では“flame”が用いられているが、スコラ哲学では、一般的に「天使」は人間と交信する場合には、空気や炎の肉体をとると考えられていた。ところが、アクウィナスは「天使」が炎の肉体を纏うはずがないと主張している。もしそうだとすれば、「天使」の触れるものは全て燃え尽きてしまうからである。結局、ダンが「天使」の肉体を表現するにあたって、“shapeless”という形容詞を用い、巧みにこの辺りの論争を避けているのかもしれない。そして、空気を、「天使」が下界に姿を現すときに、身に付ける肉体としている。

So in a voice, so in a shapeless flame
Angels affect us oft, and worshipp'd be;
Still when, to where thou wert, I came,
Some lovely glorious nothing I did see:

声として 形のない炎として
天使が僕達に力を及ぼしたり 僕達に崇拜されたりすることがよくあるように
君の存在する場所へと僕が赴くと
僕がいつも目にするのは何か愛くるしい輝かしい無のようなものだった

「無」と表現された彼女の魂の許へと赴いた彼の魂は肉体を纏い始める。その根拠はこの世での愛を成立させるためである。肉がなければ、真の愛に浸ることは不可能なのである。

Since my soul, whose child love is,

**Takes limbs of flesh, and else could nothing do,
More subtle than the parent is
Love must not be, but take a body too;**

僕の魂に宿る子は愛
僕の魂は肉の四肢を纏わなければ 何も出来ないから
愛は産みの親である魂ほど神秘に包まれているなんて考えられない
だから 肉体も纏うことになる

ここにもスコラ哲学の考え方が見受けられる。魂は「知覚」、肉体は「感覚」を司る。魂は「感覚」なしに「知覚」という本来の役割を果たすことは出来ない。二人の魂が相互に「知覚」しあい、愛の力によって結合するのも、肉体の「感覚」があつてのことなのである。愛は魂だけでは掴み所のないものになってしまう。互いの五感に訴える肉を伴って初めて二人の愛が成立するのである。

自分の魂は肉体の衣に包まれた。次に愛の神に命じて、彼女の魂に肉体を与える段階が描かれる。そうすれば、愛によって結ばれた現在の二人が登場することになる。このようにしてダンは霊肉両面に根ざした現在の愛を完全なものにするのである。

**And therefore what thou wert, and who,
I bid Love ask, and now
That it assume thy body, I allow,
And fix itself in thy lip, eye, and brow.**

だから 君の姿形それに君が誰なのか
僕は愛の神に尋ねてくれるように命じたのだ
すると君の肉体が眼の前に現れた
君の唇 瞳 それに頬に僕は思いを定めることにした

これまで読んできた第一スタンザでは、肉体が強調されているように思えるが、次のスタンザでダンには愛における魂と肉体の均衡を述べることによって、いずれか一方だけに傾く愛には確固たる安定性がないことを説く。肉体の愛に溺れてしまうと、愛そのものが危険に曝される。肉の愛という荷を積みすぎた愛の小舟は沈没すると主張し、「もっとふさわしいものを探さねば (“some fitter must be sought;”)」と記す。魂と肉体の均衡がとれた状態こそが、愛を永続させるのである。

**For, nor nothing, nor in things
Extreme, and scattering bright, can love inhere:**

無の中にも 極端に眩しい光をまき散らすもののなかにも
愛は宿ることはない

“nothing”は6行目に出てきたように、魂としての存在を指し、“things ... bright”は極度に官能的な肉体の様々な部分を表している。だが、これだけで詩は終わらない。最後にダンには自らの知識に基づいた得意の形而上学を披露して、この作品を締めくくるのである。

**Then, as an Angel, face, and wings
Of air, not pure as it, yet pure, doth wear,
So thy love may be my love's sphere;**

ならば 天使自身ほど純粹ではないけれど

それでもやはり純粋な空気の顔と翼を天使が身に纏うように
君の愛は僕の愛が創り出す天体になればいいだろう

既に述べたように、天使が人間と交信するときに身に纏うのは空気か炎である。ダンは下界を統べる天使に男性としての自らの愛を、そして天使の姿形を構成する空気を相手の女性の愛に喩えている。「天使」：「空気」＝「男性の愛」：「女性の愛」という形である。天使が天体を支配するように、彼女の愛も彼の支配下に置かれれば、真なる愛の獲得に向かって、未来にまで二人の絆を永続させることが出来るのである。そうすると、純度から考えれば、男性の愛のほうが女性の愛よりも純粋であるという結論が出てくる。男性側の思いを優位に置いていることは、女性が肉体の官能性で男性を幻惑することは無論、相手の心変わりを恐れるダンに特有の不安癖を考えると理解できるであろう。

Just such disparity
As us 'twixt Air and Angels' purity,
'Twixt women's love, and men's, will ever be.

まさにこのような違い
僕達の間にある空気の純度と天使の純度の違いが
女性の愛と男性の愛にいつまでも存在するのだ⁵

さらに“sphere”を天球と解釈すれば、男性の愛は天使のような霊的なものであり、女性の愛は男性の愛という天体を宿す天球であるとも考えられし、天使の顔と翼を構成している空気が、天使の霊的な性質を人間に伝える媒体となっているように、女性の愛も男性の魂からの愛を地上で伝える媒体として機能しているとも解釈できるだろう。こう考えれば、愛にはやはり肉が欠かせない。愛を伝えるためには、肉体が必要なのである。魂の愛も肉体を通して相手に伝わる。結局、肉体とは愛を宿した魂が相手の魂に宿る愛へと伝えてくれる媒体になっているのかもしれない。そのように考えても、ダンが恋愛における肉を軽視せず、むしろ重視していることは、説明が可能である。⁶

魂の状態にあった過去の時点での愛は、現在において肉体を媒体としてもっと豊かに愛し合う男女間に実現される。さらに恋愛の瞬間には魂と肉体のみならず、男性と女性という二元性が解消されるのである。二人が相手に対して同等の思いとともに肉体を寄せ合い、その肉体を通じて、魂の交感を経験するとき、両者は完全に一つとなる。魂の交感に過去から現在を通じ、未来にまで至る男女間の愛の安定性を示唆し、時空を超越する。しかし、そこには「均質・均等」という必要十分条件が存在する。言い換えれば、愛し合う男女の肉と魂が中和点に達したときに、二人は一つとなり、別個の存在であることも性の違いも解消されるのである。その条件を満たした愛は、ダンが理想とする真の愛へと限りになく近づいてゆき、「変化」と「死」を超越しつつ、完全性を獲得する。

本稿の冒頭で引用した詩行を最後にもう一度繰り返して第3部を閉じることにする。

Whatever dies was not mixed equally

滅びるものはすべて均質に混ざり合っていなかった

Notes

- 1) Theodore Redpath, ed.: *The Songs and Sonets of John Donne*, 2nd ed. (London: Methuen, 1983), p. 227.

テキスト引用は全てこの書物による。これ以降の引用箇所には詩および注の記載されているページを記す。詩を解釈するにあたり、上記の書物のみならず、下記の書物の注や翻訳等も参考にした。これ以降の引用箇所には参考にしたページを記す。

A. C. Clements, ed.: *John Donne's Poetry: Authoritative Texts Criticism* (New York: Norton, 1966)

Helen Gardener, ed.: *The Elegies and The Songs and Sonnets* (London: Oxford Univ. Press, 1965)
 Richard Gill : *John Donne Selected Poems: Oxford Student Texts* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1990)

H. J. C. Grierson, ed.: *Donne's Poetical Works* (London: Oxford Univ. Press, 1912), II

河村錠一郎訳：『唄とソネット』，（東京：現代思潮社，1977）

松浦嘉一編注： *Select Poems of John Donne* （東京：研究社，1940）

湯浅信之編：『ジョン・ダン詩集』，岩波文庫（東京：岩波書店、1995）

2) pp. 237-42.

Clements, pp.6-7.

Gardener, pp. 202-4.

Gill, pp.55-7.

Grierson, Commentary, pp.15-7.

河村, pp.86-68.

松浦, pp. 135-8.

湯浅, pp.48-53.

3) pp.218-26.

Clements, pp.29-31.

Gardener, pp.183-7.

Gill, pp.60-3.

Grierson, Commentary, pp.41-5.

河村, pp.156-61.

松浦, pp.187-92.

湯浅, pp.80-91.

4) pp.247-59.

Clements, pp.15-17.

Gardener, pp.192-6.

Grierson, Commentary, pp. 27-30.

河村, pp.115-9.

松浦, pp.157-162.

5) pp.196-200.

Clements, pp.11.

Gardener, pp.205-6.

Grierson, Commentary, pp. 20-2.

河村, pp.101-2.

松浦, pp.145-9.

6) Arnold Stein, *John Donne's Lyrics; The Eloquence of Action* (Minneapolis: Univ. of Minnesota Press, 1962), p. 146.

John Donne's *Songs and Sonets* —Part 3 “Soul and Body in Love”—

Satoshi NOJI

Department of Socio-Information
Faculty of Informatics
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan

(Received November 1, 2000)

In this third part of my essay entitled “Soul and Body in Love,” Donne’s philosophy of establishing true love in this world, which finally leads lovers to eternal love in heaven beyond changes and deaths on the earth, two great enemies to love, is considered by reading major three poems whose topic is significantly related to the mechanism of the soul and the body in love. He never denies physical aspects of love because he regards the body as the vehicle of the soul, emphasizing the importance of the love based on the soul at the same time. Under strong Scholastic, Neoplatonic and Petrarchan influences, he expresses in his poems his philosophy of love in logical steps as a representative Metaphysical poet with the poetic convention in his time.

The very foundation of his thoughts on love lies in reaching the state of perfect mixture or neutralization of two different things as announced in “The Good-morrow” – “Whatever dies was not mixed equally.” In other words, differences existing between two individuals’ souls and bodies in love as well as those of two sexes, man and woman, are his target for logical establishment of perfect equalization. Once the state is achieved by their well-balanced spiritual and physical love between two lovers, terrestrial love limited by time and space takes on eternally stable characteristics, which are strong enough to connect the earth to heaven. Thus troublesome duality existent in love seems to be eliminated.